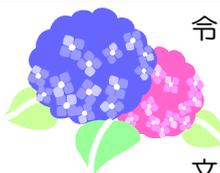


# 研修だより



文責 研修主任 K. W

## 「共に創り上げる」教師集団をめざして！

校内研究会では、パイオニア授業や参観授業の実践、ありがとうございました。3教科とも講師の先生方に参観・ご指導もいただき、今後白三小として目指していくべき授業の姿や取り組んでいく課題などが見えてきたと思います。今年度は、各教科部毎に、講師の先生からご指導をいただいたり普段の授業で困っていることを相談したりする時間もあったので、先生方一人一人にとっても貴重な時間になったのではないのでしょうか。

事後研究会の協議内容で出された成果と課題を載せました。講師の先生方からのご指導についても部会などで振り返り、今後の授業作り・授業力アップにつなげていきましょう。

※ 毎回、パイオニア授業の際に行っている今年度の共通実践する内容(板書・振り返りの視点など)は、前回の研修だよりにのせていますので、再度確認して下さい。

### 道徳科～内容項目の理解を大切に～

加藤先生からは、共に創り上げるためのポイントとして

- 本当に考えたい・・・必要感
- 何を考えているのか明確にする発問・・・比較・・・一体感
- 具体を通す・・・自分を重ねる発問・・・実感



本時のめざす子どもの姿(一体感・実感)・・・自分を見つめ直したり、価値のよさを見いだしたりする姿

めざす子どもの姿に迫るための姿・・・①発問の精選  
②比較

#### <パイオニア授業の事後研究会～協議より>

##### 【成果】

- ・比較することで視点がズレずに考えを深めることができた。
- ・子どもの発言を聞き取り授業をコーディネートする。
- ・発問の精選
- ・ルールとマナーを区別した上、比較して考えることができた。

##### 【課題】

- ・少人数での意見交換
- ・ルールのよさについて深めるような発問をして子どもの本音を引き出す展開もよかったのでは
- ・価値に迫るための手立て
- ・千代田区の人々の立場を考える

# 算数科～子どもの思考を広げる積み重ねと数学的な見方 ・考え方に基づいた関連付け

森本先生からは、共に創り上げるためのポイントとして  
○子ども達が没頭する強靱な動機が必要・・・必要感  
○その子なりの解決を大切に（個別最適）・・・一体感  
○協働したことで新しい発見、理解が深まる・・・実感  
～必要感・一体感・実感に値する子どもの姿をイメージし共有する～



本時のめざす子どもの姿・・・筆算の仕方を既習をもとに考えよう  
めざす子どもの姿に迫るための姿・・・ ①操作活動  
②ペアで筆算の仕方を話し合う

## <パイオニア授業の事後研究会～協議より>

### 【成果】

- ・前時とのちがいに着目させることで「空位のある計算の方法を考える」と子ども達の視点をしぼることができた。
- ・筆算、図、言葉での説明を関連付けることで、繰り下がりの①の中がどんな様子なのか視覚で捉えたり、言葉で示すところはどこなのか指をさしたりしてより理解を深めることができた。
- ・解決方法の手段が多く、一人一人が見通しをもつことができた。
- ・前時とのつながりからめあてを立てる。
- ・数カードの操作を用いた自力解決

### 【課題】

- ・さまざまな言葉（子ども達自身の言葉）で説明すればさらに理解が深まったのではないか。
- ・言葉、図、筆算の関連付け、数カードと筆算とことばの関連付け
- ・どんな言葉でまとめるか

# 国語～考えの根拠を明確にすることと関連付けて考える ことよさ

武田先生からは、共に創り上げるためのポイントとして  
○児童の考えを尊重し、共に授業をつくる～傾聴と問い返し～  
※「それってどういうこと」「もう少し詳しく聞かせて」  
○既習事項、自分の知識や経験、友達の発言、他教科と関連付ける  
○思考の可視化で子どもたちの言葉の背景にあるものを引き出す（板書、ノートへの記述など）  
このような一体感の積み重ねで考えが深まり、広がっていく・・・実感



本時のめざす子どもの姿(一体感・実感)・・・キーワードを手がかりに、父親の思いを  
想像する姿  
めざす子どもの姿に迫るための姿・・・①「一つだけ」という言葉の表す意味の違いを  
比較する。  
②「一つの〇」と言い換えることのできる言葉を探す。

<パイオニア授業の事後研究会～協議より>

【成果】

- ・導入時、「一つだけ」というキーワードにしぼって比較していたので、焦点化された話し合いができた。
- ・板書の色分け、上下の工夫 振り返り項目の焦点化
- ・「～のに、なぜ～？」というゆさぶり→考えたいと思わせることができる。(必要感)
- ・場面を比較して読むことで父親の思いを考えることができた。
- ・ねらいに迫るための段階的な発問や学習活動が児童の思考の流れにそった
- ・学習計画による必要感の高まり

【課題】

- ・子どもの考えに叙述に基づく根拠が加わると思考が深まったのではないか。叙述を根拠に発表する。
- ・自分で考える時間の確保
- ・ペア・グループでの話し合いで深める活動

今回の事後研究会協議では、成果と課題を見取っていただきありがとうございました。  
先生方の付箋から2枚ほど内容を紹介したいと思います。

A 教師の誤答

同じまちがいをした子のはっとした表情  
うまく表せずもやもやしていた？  
けど、子ども達の説明を聞いてなんとなく  
わかった様子。  
もう一度確かめることができ、すっきり  
表情に変化あり

B

1人で解決できず、全体共有  
でも解決しなかった子への支援  
はどうあるべきか  
ペア・グループも取り入れる  
とよいか。

Aは、子どもの様子から活動に対しての子どもの変化がとてもよく伝わってくる見取りです。この子どもにとっては、効果的な活動だったということがわかります。一方で、Bは学級全員の理解を目指していくためには何とかしなければいけなかった場面だと思えます。実態に応じた声かけを用意できればよかったなという教師側の反省も大きいのですが、このような場面でのどのようにしていくとより効果的かなど話し合うのも有意義だと思います。

このように授業研究会はたくさんの先生方の目でたくさんの子ども達の様子を見取れるチャンスにもなりますね。子ども達の具体的な姿で授業を振り返ることができるのが、子どもに寄りそい、共に授業を創るきっかけになっていくと思えました。

講師の先生方のご指導からも、子ども達が「考えたい」という必要感、子ども達の考えを深め、広げる一体感の大切さを改めて確認できました。

「それってどういうこと」「もう少し詳しく聞かせて」と教師側も投げかけながら授業実践を積み重ねていきましょう。